

とうきょうすくわくプログラム
二〇二四年度活動報告書

まちの保育園 南青山

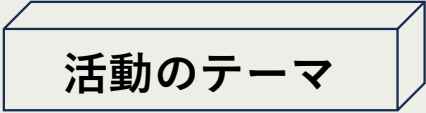


1. 活動のテーマ









活動のテーマ

「しぜん」

まちの保育園 南青山はビルの中にある保育園です。
青山という土地柄、高層ビルに囲まれた環境ではありますが、
園庭や青山公園など、子どもたちが日常的に自然と関われる機会に恵まれています。

青山という街のアイデンティティの中で、
子どもたちはどのように自然と混ざり合うことができるのでしょうか。
また、自然は子どもたちにどのような影響を与えてくれるのでしょうか。

都会と自然、屋外と室内という相対するものを行ったり来たりしながら、
子どもたちがせかいの美しさや面白さに出会えるようお願い、活動を展開しています。

2. プロジェクトの進め方

探究する

子どもたちは「なぜ」「どうして」「どのようにして」と絶えず問います。

子どもたちの問いかけに、答えを与えるのではなく、子どもたちと大人たちが一緒に問いを深め、知識を共同で構築するプロセスを大切にしています。

保育者は子どもたちが主体的にせかいへ手を伸ばし、出会えるような環境を用意し、子どもの経験や学びを支えるパートナーとして伴走しています。



共有する

ドキュメンテーション

子どもたちが何に興味を持ち、何におもしろさを感じているのか。

その経験は

- ・その子にとってどんな経験なのか？
- ・どんな発達欲求があるのか？
- ・どうしてそれをしたくなるのか？



子どもの姿からその言動の背景を探り、更に発達の上でその経験がその子にとってどんな経験であるのかを職員間に対話し、記録に残しています。
こうしたドキュメンテーションは毎日保護者へ配信をしている他、園内に掲示することで、クラスの垣根を超えた対話が生まれています。

学びを深める

月に2度、法人所属のペタゴジカルパートナーと共に探究活動をし、子どもの姿と対話を通して、学びを深めています。

※ペタゴジカルパートナーは、レッジョ・エミリアアプローチにおける教育専門家の役割です。
教師や保育者とは異なり、教育内容の研究や教材選定、保護者や地域との連携などを担います。
子どもや保護者、教育者、地域の人々との架け橋的な役割を担い、教育現場のビジョンを共有する役割も担います。

3. 大切にしたこと

準備した素材や道具、環境の設定

自然との出会い

子どもたちが自然をどのように捉え、どのように感じているのかを保育者は共に感じ、リサーチしています。

自然との出会い直し・再会

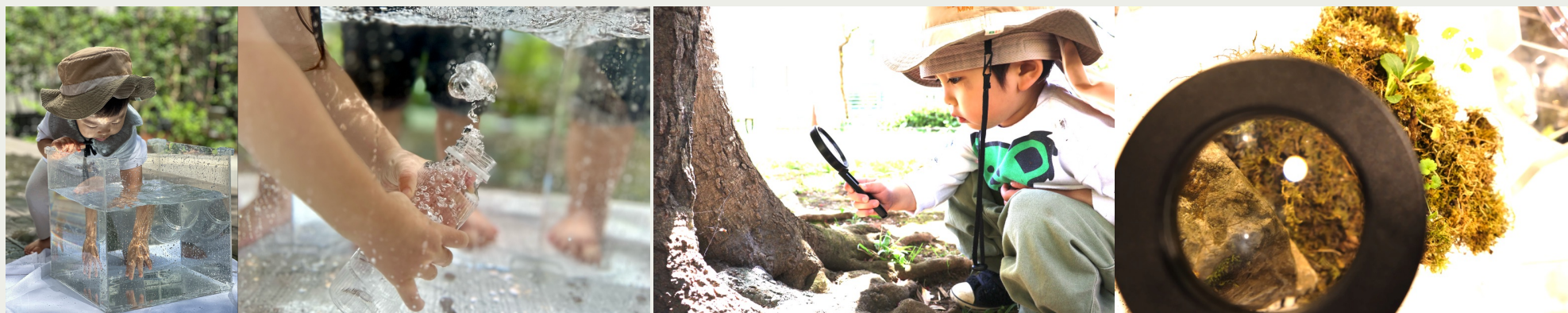
戸外から園へ持ち帰った自然物をよく観ることや感じる機会を意識的に設けています。新たな気づきや仮説が生まれ、更なる好奇心が生まれます。

以上を踏まえた上で次の3つのポイントと共に探究を行いました。

- ・子どもたちが「よくみる」ことができるように …①
- ・子どもたちがデジタルの世界といたりきたりできるように …②
- ・子どもたちの感じたことを表現することが叶うように …③

準備した素材や道具、環境の設定

① 子どもたちが「よくみる」ことができるように



透明アクリルケース

水の探究では泡や波紋、反射などの自然現象に出会う。

水の美しさ、不思議さ、面白さに出会い、
こうしたらどうなる？と試しながら遊びを
繰り返す姿があった。

むしめがね・拡大鏡・マイクروسコープ

子どもたちが自ら「知ろう」としに行く。
大きく見えることで出会うことができるせかい。

準備した素材や道具、環境の設定

ライトテーブルとスタンドライト

ライトテーブルと自然物で「外の世界」を演出

「再会する」・・・ライトテーブルの光を扱うことで、葉の葉脈や色の違いやそのものの美しさに出会えたり、手に取ったりの経験が改めて室内でもできるように設定。

「個々の世界を誘う」・・・スタンドライトと紙を設定することで、個々の世界を誘う。



ライトテーブルの光に浮かぶ素材を選んで、
手にとる。手から、光に戻す。
外で出会った自然物と光の中で、
もう一度出会い直す。

保育室内とは違った世界にも安心して
入り込めるように、小さな世界も設定。

準備した素材や道具、環境の設定

② 子どもたちがデジタルの世界といたりきたりできるように



デジタルツールを使っでの出会い直し
「OHPを使い、雨をつくる」



準備した素材や道具、環境の設定

② 子どもたちがデジタルの世界とゆったりきたりできるように



「銀杏の葉との出会いなおし」

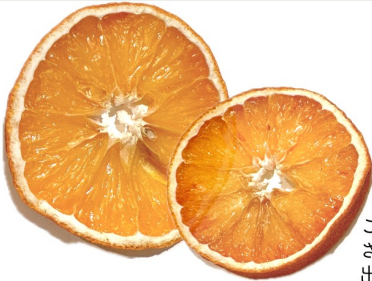
0歳児クラスのイチヨウの探究

慣れ親しんだ保育室で子どもたちが安心してイチヨウと出会い直して欲しいという保育者の思いから、保育室で銀杏並木を再現しました。

子どもたちは改めていちょうの葉と向き合い、拾い集めて遊ぶ他、ちぎる・丸める等の感触を味わったり、香りに興味を示し試して遊んでいました。

準備した素材や道具、環境の設定

③子どもたちの感じたことを表現することが叶うように



ブラッドオレンジとの出会い

めぶきグループのあきらさんのご家族がブラッドオレンジを寄付してくださいました。

近くにいただけで甘酸っぱい、さわやかな香りが漂ってきます。

子どもたちにとってはおやつでいただくことも多く、身近な存在であろうオレンジ。さまざまなかたちにカットして、オレンジと出会ってみました。



香りに誘われて

オレンジの断面をよく観ます。触れていると「ここはぶにぶにしてる」「ざらざら」と感触の違いに気がつきました。

虫眼鏡を使って覗いてみると、大きく映ったオレンジと出会いました。

「ふわふわしてる」「ここはしろ」視覚・触覚・嗅覚を使って見つけたことを次々と教えてくれます。



輪切りにしたオレンジと出会って、子どもたちがしたいことは鼻を近づけて香りを確かめること。何度も何度も確かめます。何度も確かめたくなるほどのいい香り。子どもたちは「あまい」と表現していました。

よく観る





2025年 4月16日



各種画材(スタビロ、クレヨン、パステル等) 質感の異なる紙

子どもたちが素材の違いを楽しめるよう、さまざまな種類の紙や画材を用意しています。

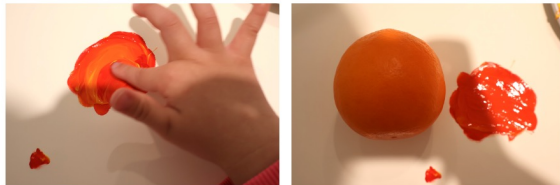
準備した素材や道具、環境の設定

③子どもたちの感じたことを表現することが叶うように

ブラッドオレンジのいろ

2025年 4月17日

オレンジとの出会いから香りや触り心地に気がつき、その経験を『いろ』を使って表現する子どもたち。感じたことを色で表現することの面白さにたくさん出会ってほしいという願いを込めて、今回は絵の具を使って描くことを提案してみました。



「みて！ いっしょ！」 りお(3.9)

黄色と赤の絵の具を手にとって、紙の上に広げて色を作っていきます。
色同士が混ざり合い、溶け合う過程の美しさに目と心を奪われる子どもたち。



こころとからだ、どちらが先に動いたのでしょうか。



えのぐ、筆、鏡、虫眼鏡
スタンドライト、拡大鏡

4. パブリケーションの作成

パブリケーションの作成

毎日配信しているドキュメンテーションを元に、子どもたちが一年を通して歩んできた探究の軌跡を一冊にまとめたパブリケーションを作成しました。

子どもの成長を振り返りながら自分たちの保育・探究について振り返る機会となり、職員の育成にも繋がりました。また、保護者と共有することで子どもたちの豊かさを分かち合い、クラスの垣根を超えて成長を喜び合う機会となったように思います。



水「しずく（0歳児）」 「落ちる（1歳児）」 「こうしたらどうなる？（2歳児）」
葉っぱ「いちょう（0歳児）」 「ちぎる・まく（1歳児）」 「色・違い（2歳児）」
砂、土「触る（0歳児）」 「手指（1歳児）」 「砂・土でできること（2歳児）」

5.活動中の子どもの姿・声、 子ども同士や保育者との関わり

活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

- ・子どもたちはいつも気になることへの探索する手が止まらず、一人一人が“これはどうなっているの？”と何度も何度も同じ動きを繰り返していた。
- ・少人数での活動を意識的に組み込むようにすると、子どもも自然と一緒に探究する相手への視線が増えていた。一人の興味が二人の興味に少しずつ広がって、それぞれのやりたいことが混じり合っていた。
- ・0歳児は「はじめての出会い」に対して、不快だったり心地良いと感じながら慣れる、順応する、嫌だったものが好きになることもあった。
- ・2歳児は「こうしたらどうなる？」と自分で試す姿があり、そばにいる子と共有する姿があった。

6.振り返りによって得た保育者の気づき

活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

- ・ 0歳児は素材との出会いに本能的に関わっていた。その素材が持っている良さに気がつき、模索するように楽しんでいた。
- ・ 子どもたちの姿を見て、少しずつ保育者も子どもたちと一緒に問いを持ったり、深めたり、こんな素材はどう？とアイデアを持つようになった。
- ・ 子どもと共に自然と出会ったからこそ、「水や落ち葉ってこんなにも美しく面白いものなんだ」と感じる事が出来た。“日常の中にこんなに自然があるんだな”と子どもたちが気づかせてくれた。
- ・ 皆でことばを出し合ってきたことで、素材そのものの見え方に深みがかって変化していった。
- ・ 考えるよりも先に体が動いてしまう、そんな場面をたくさん見つけた。



子どもたちの探究は日々続いてゆきます

子どもたちは手を動かしながら目で感じている、考えている。

そんな場面を様々な探究活動の中で幾度も目にしました。時には仮説を立て雄弁に語り、また時にはわたしたちへ問いを投げかけてくる。彼らは冒険家でありながら哲学者であり、詩人なのです。まちの保育園で共に歩んだ一年間、子どもたちへ対する尊敬の念が尽きることがありませんでした。

子どもたちのところが動いた瞬間、寄り添う保育者のところもまた動いています。

そして常に「これは子どもにとってどんな経験であるのか」を考え、胸を弾ませながら次なる展開を考えてきました。

これからも子どもたちがせかいの美しさや面白さに出会い、仲間と一緒にいる、共にあるということを喜びながら日々を送れるよう、精一杯伴走していきたいです。